紀伊國名所圖會

和歌山部

之巻下

二十五
十三

服部文庫
イ17
1550
2

117
1550
2

紀伊國名所圖會巻之一之下

府城

寄合橋
名所燒陶器
馬ヶ瀬
青岸
住達神社（松尾社 竈ノ社）
卐ヶ辻
安養寺（雄王山寺）
吹上寺
式宮旧址
糸藏院（大師堂 僧広全）

總系
類宮（樓門 講堂）
竹法稲荷社
燈籠堂
蛭児神社（然名大拯院 雄之宮碑洛）
法善寺（観音堂）
光明院
亀ヶ坂
雄清水

木綿
紋羽織
傳法
竹法橋
木場
城山
蛭子祠
（紙園社 伊勢兩宮 稲荷社 弁才天 王舟社院 西方寺）
（住吉社 少彦名社 天満宮 神楽舎 李真宗碑 教恩院）
（出雲社 諏訪社 子守勝手社 紀舟社）
湊川口
小野所
（岸松院 保寿院 大智院）

西岸寺
（大原寺 孤竹寺 阿伽石 地蔵堂 連理松）
天狗石
日蓮
長覚寺
粉の浦
西要寺
仙人硯

吹上

吹上谷

吹上白菊

報恩寺

蓮心寺

瑞雲院
玉泉房

恵光寺

大圓坊
玉林房

護念寺

大恩寺

大泉寺

明王院

秋葉権現
冨士淺間

今宿神明社

天満宮
祇殿

吹上濱

吹上丹浦

吹上祇社

霊山院
薬師院
鐘楼堂
三十番神祠

法雲院
狐塚

三光寺

観音堂
松林院
弩観音
玄恕上人

延寿院

吹上小野

網師岡

位牌堂
成就門
拝殿
黒書院
三十番神社
歴代廟
祖師堂
林泉
祖師堂

妙法寺

観音堂
地蔵堂
伊勢両宮
正寿院
春日神

最勝院
八幡宮
霊舎
侍楼堂

大多ち

吹上峯

吹上濱汐干

多妙寺

妙見堂
祖師堂
鐘楼堂

釈迦堂
大立院
本成院
位牌堂
三十番神祠

本光寺

慈教院

一切経蔵
稲荷祠

梅ヶ原

稲荷神

大師堂
持仏堂
弁財天
摩利支天
元三大師堂
十王堂
大国玉神
月讀宮
猿田彦神
椎日尊
幡随意上人墓

万性寺

護摩堂
疱瘡守神
猿八神

堀留眺望

丈六寺

浄心寺

光明寺

天王寺

芭蕉翁理石
春山翁理石
三十番神祠
丈六八岩
弁財天社
天王殿

稲荷社
岡山堂

高松寺

井原神社

真光寺山

少し検校之碑石

宮頂神社

東覚寺山

巽
侍楼堂

齊堂
観音堂

位牌堂

宮合橋　内町より淀へ架る

當津の眼目勝迄の間悉く金城の小辺にあり橋上の行人
まるも知めも知らぬ集るの久るべし橋下い出船入
れのたえまもなくて誠に南の一都會とつちまる

望二君之城　合雜

大藩尤貴顕多乎若山城南紀鎮嚴在　東君廟壮
成魚塩元有利草木豈無栄仁政聞寰内士民諷詠情

寒月やえとる城と鯖の声　紀藩　桃林

總糸

本綿

紋羽織本綿

京都帝國大學圖書

寄合橋

謝泉南广生所
贈棉布因憶南
紀祇伯玉

南方舊聞木綿
花奇卉殊勝桑
與麻三尖楓葉
未深霜一寸葵
心欲傾陽瑤水
蟠桃子正結金
堤弱柳花如雪
蜚殼剖時迸珠
淚鵞群鬬來飄
素毳人間一葉
碧梧飛泉女夜
織月前機初傳
海上珊瑚市應

換山中薜荔衣
美人所贈我何
酬南望側身歌
四愁君不都布
單衣公孫作馬
援到日不樂留
可憐老去心空
壯却為平生憶
少遊

新井白石

紋羽織屋

定紋うして
ゆこゝの
地も
あしふくゝへ
紀州
ゆんぞの
とけ
ぬぐ
よれ

法花
後綱

文政年間八宝屋七の年より
和哥山新色三丁目雑賀屋某
しる家ゆり染六織定紋と業と
ゆゝる家ゆり染六織定紋と業と
武夜の家と流人と
なる織の家ゆゝ
織の定紋地と紋
織の名と
織出し
明和のゝ
より文政ゝ
をゆゝゝなり
ゝゝまゝゝ八南機と
ゝゝ後丁考

矢ゆゝゝの
異ゆ後ゆのあゝゝ
紀の国ゝゝあゝゝ
ゝれしき

新賀名
蘭岡

名所焼陶器 山口荘雄の山の中に熟して作りたるものなり中に

類宮 学舎修の所なり 構門 東西五間南北三間中門柵門あり 講堂 八間に五間 額

尚國上古以来類宮の設なくんばあるべからざるものなり中
葉以後衰微せらるるに及び舊典のうんぬんの名を聞初
南龍公の尚国よりこれを興さるるやもっぱら文恬武熙のまつりごと
をたしなみ類宮の学業をしてうるおしめ国家の子弟をして
邪くに乎うる德をすぐれたるものつくり創
業の世をなさしめたまふ皇あらんに孝ぐ
有廟御在藩の日たまふ今の地に仮学舎をいと
なみたまふこと尚つまびらかなり
當君御襲封のもとめ
先君の厚志を継ぎ竟に天保七年有司に命じ

これを造立せしめ儒員日々に輪番をもって出勤し藩
中子弟たるべき庶人のもとめにしたがいまて教育をなすこと旦
年毎に授業の教最もはげしく出務のもとめに特に奶ねあつく
これを褒賞たまふ例崇秋の二時にはかつ祭奠を変
國君御在国にいたっては臨幸ありて其礼いと
厚重なりかつ行ふ文宴日々に啓々たり俊傑の士國々にて
民表悔の徳を修むるもの今に多くあり南方文明の化のおこなは
るること実をもんぬるに我邦学校を立つること 天智天皇
の御よりはじまり 持統の御代に大学寮あり 孝謙の御代に
桓武の御代にかけて生徒稍に衆多なるにいたり勧学田を
おくこと奈良に供しなまつり国書をもうけたり 淳和時学
の両院い源氏の学館にしたがいて左京紀にそなはり学校
い橘氏の学館にしたがい橘太后嘉智の創たるところ初学

を藤原氏の学館にして[illegible]
麿い弘文院[illegible]小野皇[illegible]利の学校をいとなみ
[illegible]文学の設けて[illegible]教とたるのそなへたりさ[illegible]書と
いる書のいも支那より渡[illegible]
[illegible]彼[illegible]ふ[illegible]邦[illegible]
比但徳先生の足利学校[illegible]
持[illegible]ふ翻刻[illegible]

傳法

紺屋町

[illegible]年中根来と[illegible]

傳法橋

[illegible]

馬ヶ瀬

[illegible]橋の[illegible]町より西
[illegible]きしの角にあり
[illegible]

傳法稲荷社

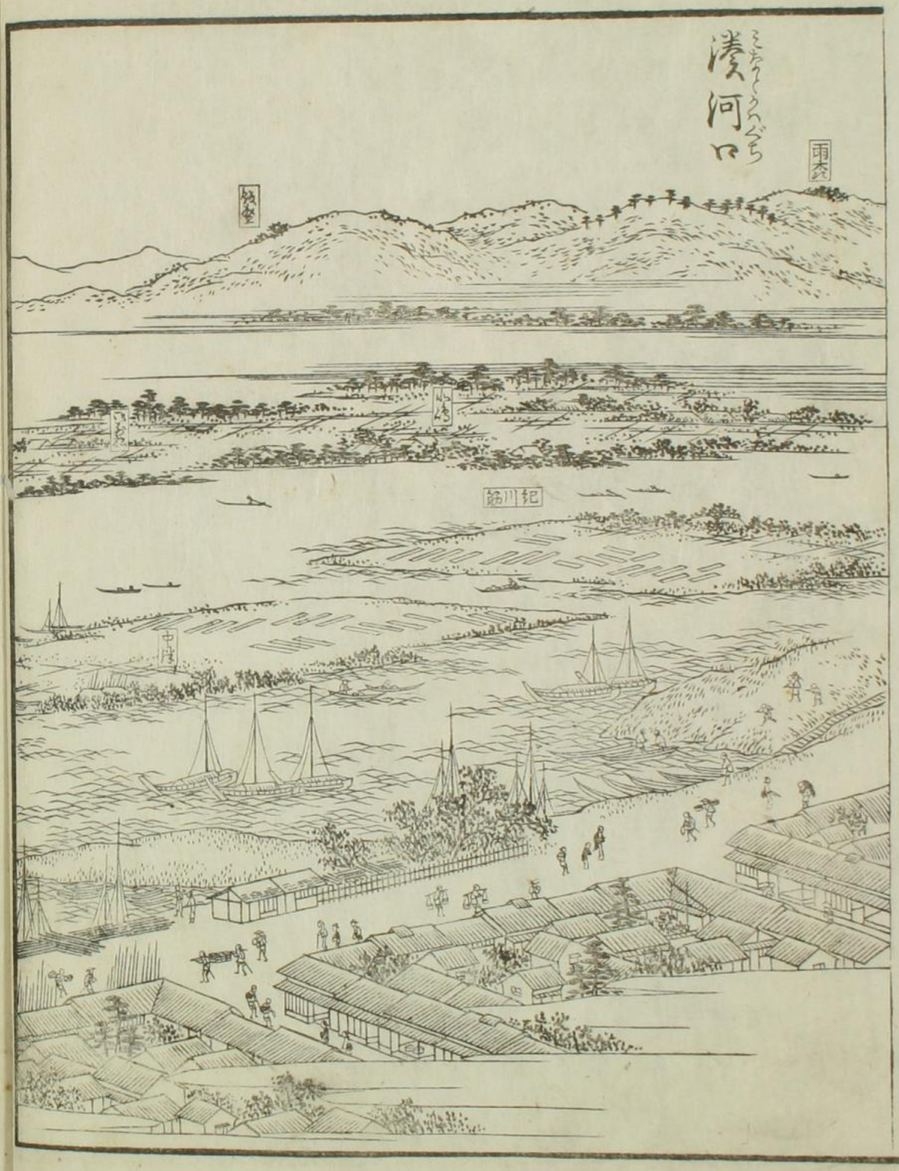
[illegible]

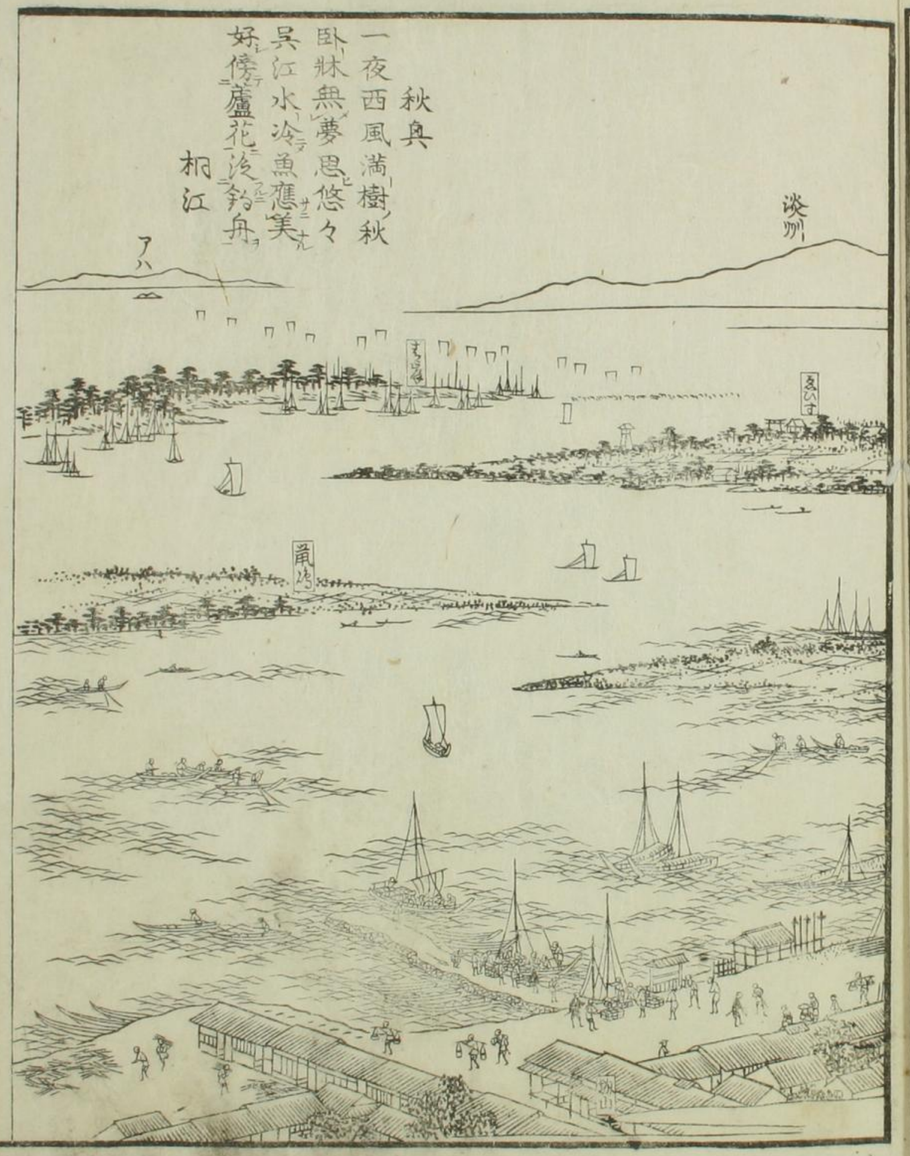
木場

[illegible]吉[illegible]山中より伐出し
[illegible]集て[illegible]
[illegible]杉丸太[illegible]として紀の川
[illegible]市[illegible]
[illegible]

城山

[illegible]
[illegible]大文年間中國の探題大内義隆家臣陶尾張守[illegible]


淺河口
雨太公
紀川筋


秋興
一夜西風滿樹秋
臥牀無夢思悠々
呉江水冷魚應美
好傍蘆花浪釣舟
相江
淡州
アハ
角浦

入道全善の出だす城跡なりとて吹上の精舎の辺まで
一堆の岡ふたしく淺の河上より時鳥戸折なあせ山魏然と
る壮観なり

二ヶ年あくるすゝみ川　煙樹　若山画雛

まそ岸

川口のさるこのさをいとの海苔の栗津にく恋ふるいとこと
まそだに水しく夢なりす更よあるときしろ名あり

涼しさやうなまつ船の帆ちらく　正秀

燈籠堂

川口のさとれ林の内よあるつ〳〵しく和田浦経栄のころ二比丘のひしこと
あるく〳〵と恵くいくる迎ふ高れ入れの見あくたす
外傷虎斑の書はちろと小弥所よ

蛭子の祠

神代よりたかもたるを桜翁　江戸　貞佐

ゑる手のいとふたるあく柳まて　加賀　千代

伊達神社

小弥所

祭る神一座五十猛命

五十猛命のはくくるる名る山東の荘
伊達郡曽根の郷下たるしく
倭日本後紀に代宮遊ふと桜たるよ仁明天
の名る正五位下文徳天の名るる四位下
天帝の名るるこ品とるみなくるる
国神名帳に正一位伊達神社くちるる
神古まで吹上の名る
名なすて吹上の名る
年間株間の名るる伊達神社と

[illegible]

蛭児神社

[illegible]

赤社

祇園牛頭天王　住吉大明神　諏訪明神　熊野権現社　稲荷三社　竈山社　合殿

少彦名命　子守神　勝手神　伊勢両皇大神　上根岩神　松尾神　天満宮

八幡宮社　熊野権現社　稲荷三社　竈山社　合殿

鎮守社　光國主法の家　舞殿　市神楽舎

雄之宮　[illegible]

雄之宮碑銘

海部郡宇治渓昔建題國社合祭蛭児神余生此郷嘗聞此地蓋五瀬命雄詰而薨之處因名男之宮[illegible]社辺所阡陌也名曰雄之町小野案古事記神武帝南方廻幸到紀國男之水門而詔負賤奴之手乎丸為男逮而崩故號其水門謂男水門也陵即在紀國之竈山也按之日本紀大同小異也今以古事記為據遂告洞官邑長別立一區封土蕃艸以石冠焉余故勒行石以壽千無疆

寛文九己酉歳六月廿二日　梅溪李全直建之并書

小野町

[illegible]

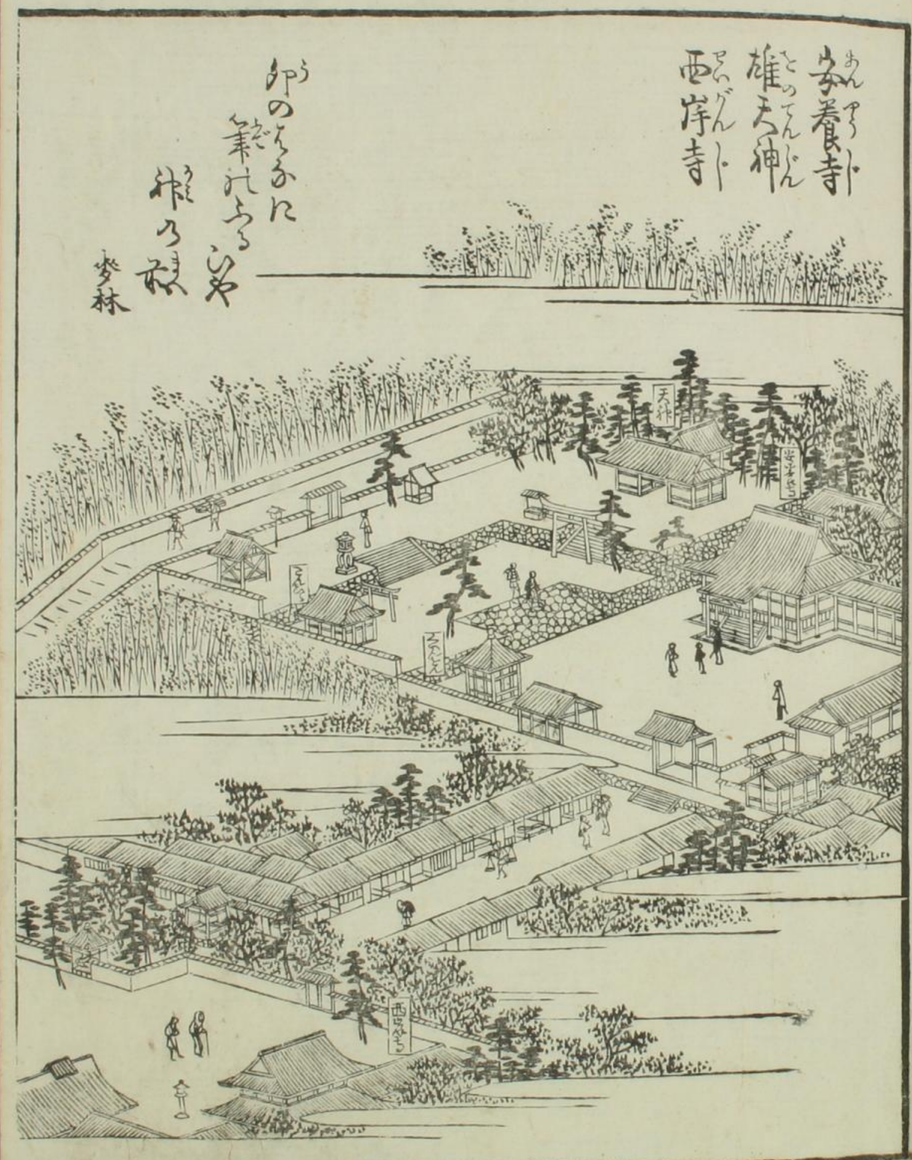
玉隆山海善寺

[illegible]

なる由なり[illegible]王船社の神と称へたてまつる神功皇后三韓より帰陣まう[illegible]
[illegible]男の水門へ[illegible]
[illegible]在ける[illegible]一日[illegible]檀[illegible]崇まつりて[illegible]
[illegible]神功皇后食國の[illegible]
[illegible]威徳をのそたまひ[illegible]丹生津姫に山地一万町とゝぬる[illegible]
て金剛峯寺と号[illegible]
[illegible]
[illegible]

朝鮮國李氏眞榮之碑石　[illegible]五年　[illegible]生　[illegible]十年十二月十九日卒[illegible]
[illegible]
[illegible]

尚寺の開基詳ならず中興開山吾法上人の美濃國谷汲寺の住侶なるゝ[illegible]
[illegible]田[illegible]の車[illegible]の[illegible]浦の漁師右[illegible]つ吉[illegible]
宿[illegible]王船神社の車[illegible]
[illegible]廢[illegible]再興して[illegible]と建[illegible]王船の神社と領



寺とゝ〳〵けり給るに彼地大浪ごとに救苦給るによりて乃号
間こゝふ堂宇成うゐ〳〵こゝ亜ゝ仏の除刹〳〵ふたうめ
小野山安養寺　小人町南にあり浄宗に属す　本尊阿弥陀佛　安阿弥作　観音世
尊者の　雄天慶大自在天神社　八天暦年中橘直幹卿五國へ左遷の節小祠を立て祭り
〳〵こゝも都に菅神を祭り給ひ〳〵なり志紀郡やゝ〳〵勅免あり〳〵後の後霊
告のこゝろ　況伊國男の水門和田浦ふなづまりまでこゝろ霊にたゝりて雄の
とわ田の後陳浪にたゝりて雄の
地へ遷座〳〵なまふとゝろう
河神祭　梅あゝ殘り陽をよつらまで吾立ちうく要魔うセゞん
鶯も三枝とたゝへむ名乃大郎　麥林
夫當寺の冥奏一遍上人の俗姓は伊豫国久万郡七郎道廣乃
二男にして雅名を杉秀光と云て幼少より聰明にして善
根成る信あり建長五年同國大台宗の繼宗寺の縁教律
師よりて繫蒲受戒〳〵随縁房と号し十九歳一遍后文永元年戊
子宗至達上人よりまぐひ名を智真とあらためくり易行念仏

門に入建治元年冬十月下旬より然るに吾師幸宮證誠
勸に一百日参籠〳〵念仏安心の口訣を行願〳〵る人に
年二月廿五日大往生の示現のことあり　陽のこゝろに碑あり其ゝ
より一遍上人〳〵あ〳〵むれ勅よりやく南無阿弥陀仏六十
万人
生〳〵のれと諸国の庶民よ織数に十八ケ年のあゝだ回國修行
志ゝ〳〵二年八月廿三日横死五庫津に杉ゝく遷
化〳〵ふ當國法那雜かの荘小名村のこゝに和田
浦ゝゝ艸庵あり〳〵た志ゝ〳〵ぐめ念仏弘通あセ
ゝ〳〵よりて庵主唯阿弥陀ゝて法弟とゝ〳〵
其ゝ後ゝ永四年畠山右衛門督菩國寺を舍成再営〳〵く
時宗念仏の道場ゝふたゝ〳〵り　其ゝ田園若干の寄附あり　ゝるに意仁乃
兵火よ羅〳〵荒廃に杉ゝびゝを幸ゝる者〳〵れて大陽寺と
乃ゝ年中和田浦ゝり當湊小名村　勅小名の所ゝふに引移ゝと

芝長年中栗山果報院此地ゟ移し〻今の通坂ゟ右ゟ

孤圓山浄秀院西岸寺　開山　法然上人　本尊阿弥陀仏　左ゟ長

二尺四寸余安阿弥　脇士　勢至菩薩　観音菩薩　左子堂　子と懺悔と安産ゟ　鎮守祠

八幡大菩薩　執金剛神作

当寺ハ弘治年中北条氏右衛門大夫の家臣荒木右衛門尉の建立ゟ天正十年十一月十三日寂れ什物ゟ者上人自筆の画像激い赤ゟ他

人皇百八世後陽成院の御宸筆ゟ記れあり　相模のわりもさい那記れあり　紅寿日信　弘三戸四条

林鶯山憶西院長覚寺　本尊阿弥陀佛

寺傳ゟ日夫当ちハ超覚法印法元の開基ゟ〻始ハ天台乃

道場ゟり清元の俗姓と北畠権中納言具教ゟ入その先を

人皇六十二代村上天皇第七の王子二品中務卿具平親王十四代

従二位准后親房ゟり新房賞く暦應三年西園和尚の

浦ゟる小の上ゟ艸庵ゟ作ゟる自ゟ林鶯ゟ号ゟ

世の置塵とさけ〻ゟ寂寞とあるんじ〻ゟ

父師重ゞ十七回の遠忌なるに付き善提のために石塔造立とたゝく
今に寺内にあり　まゝ夫大仏殿を再興し　くこゝに伝鎮守こゝろくして延
文四年四月十八日終ゝ六十七歳にして生母の墓のうち六代目
教の代ゝ伝ゝ伝ゝ伝物図可徴に伝ゝ伝ゝ織田信長と牧谷
合戦ゝ和ゝ伝ゝ永禄九年十月和睦のこゝろのい信長ゞ二男信
雄をもつて奥教の壇ゝ尋ゝ文亀元年九月奥教入道して
法諱を超覚と号ス　後法光と　あゝゝむ　ゝるに超覚五男あり　すなわち
信雄とうゝゝ弟ゝろあり　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
に於ゝ信長ゝ激怒ゝ天正四年十一月廿五日軍を起ゝ
不ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝゝ

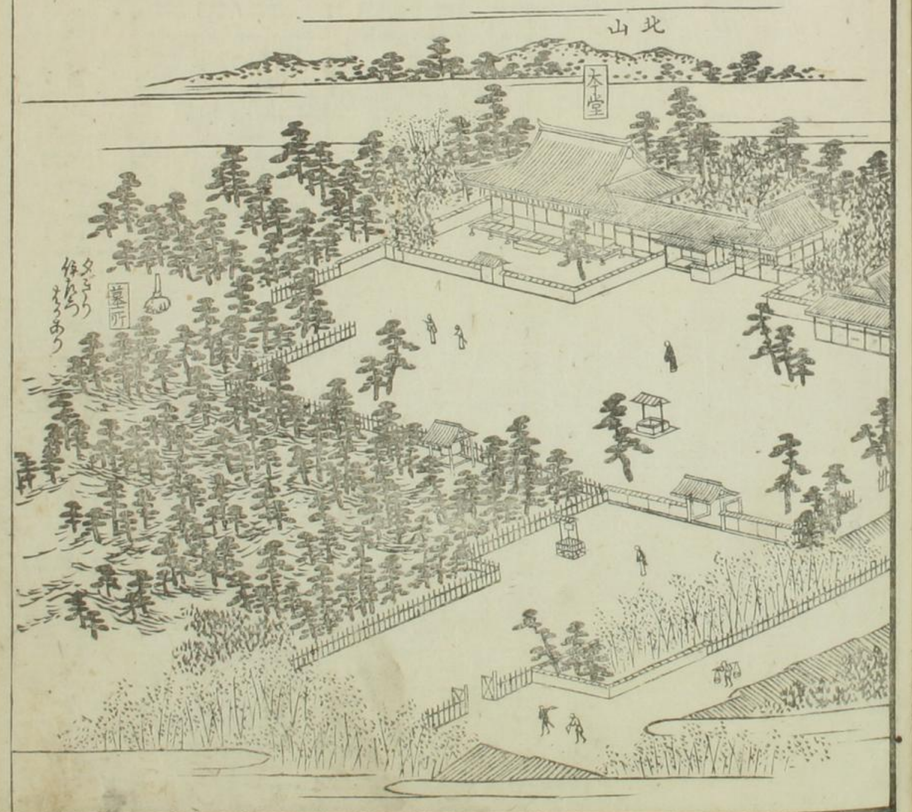
其中にとびつてんとちてもへ形よ孫市体なつる常に超覚法印
に去てしく交てしらべけ〳〵急をはげく助力をんに超覚元
より信長よ深さと恨あまべたたすくこ以成許諾せ〳〵わどに
二人をぢくたせううて其由市門主よ報ぐちゑんとちるん
かくこんるうあてこ〳〵こ成ぐめをに顕如上人市長の細
をちぢ〳〵せちひつやく〳〵よ〳〵るく家一分をわ〳〵むにあれぐも
勿待ちくもちる程之年市若員あ〳〵たなうい無立ち〳〵さ
ひ〳〵他力本願のこ以ぶ家世にあちく滅亡ちんちうに成く
も恨ちれ〳〵たいあ代門徒のこあに遺〳〵家色たなう人市真
影にこれをおち市記会なるふ怨敵の手に去ん与ぶさても
ちるをあるうに山ぐらぐのすめよ化法のこあよ成止るべと
のこるこ門徒ちもこふ涙をちぐ〳〵て言契にちくて性称名
とぞちに〳〵たるかくくあるぐきことるれば門徒ち上人をとちく元

ゆるこ〳〵せ弥勒寺山にうたし〳〵なる教如上人にちさに市思業
をあぐこ〳〵れいふゆて長考に設こ〳〵れ義をこうそのへんとひ
そうに忍び出させこるひ〳〵れ寄手の者ども方無と論ぢべわと
討取んと追来るかぐに上人のぐれちてころもちく住よ雑賀
崎ちる鷺の巣こるる嚴にこるれたまひ三日三夜ぐ花に市会
来ども絶たこう人毋ちれ不思議ちるに法上よ端乗ちる
かん人おちれこてかことに死ぬして長刀と止車のこくにあちち
ひ〳〵敵をちぐ〳〵ぢ敵ひ〳〵ぐ寄手いれもらあ女人のたこくたよ
ぢく〳〵迫よるこもちきぐ遠巻にを出ちれこてこれた六月
二日京都本能寺にれるく信長父子ぬ焼ぐ者よ生ち合ち
ぐれに丹羽ぐ軍中係よ接れ〳〵落武をすてこ〳〵ふ家さに
たと上京ロ〳〵ぐさこも危急のれるに先ちく逃ち明に蜀して
市門主ぬ大ぐぬ寄ち門徒のめんく安堵のれりひとちこれ

けりとるにくもりの安人い天ちの神の化にしく其へるうゝか
山氏浪して故をとるあ日なぐちとさあくの霊験ありさ
まに其後西沖門主に翌九年八月まで滞廣ようてもあひ
しづえしよりして當らよ移へたまひ又の年の六月まで住せ
なま人此所超覚に教如上人の御勧化を聴聞ちまり頓ほと
宗の御給して市ヲ子ともう法諱をあゝくあくにちえとあ
こまよう永くあこふの伝場ふちりうちう上洛の要所なの法華
ほのうんぐよ伝人近ち再建あゝく美麗なり日毎の晨鯨の初ぐく
より老若の緇素袖伝ねれ夏の称名日くにあゝくちとば
去此不遠の浄ちもいつぐし
什物赤栴檀阿弥陀如来尊像 七三尺三寸八ア名太神の作つひに
関白秀吉朝鮮伐の打〳〵このうちまま紫持後のちるものこのおう山
に移つく住居セしたのりめ奉ふようゝふさくちゝふるしこころのそう容なりある
時寺に住て尊家卿所持長刀 志津三郎氏作。此顕家公の
尚寺納むと云 鎮守府大将軍源顕家卿所持長刀 志津三郎氏作。此顕家公の
石塔和泉国安部野小あり

吹上寺

性苔面海松や吹とう人
ふよ伊ちふうらつるりのあう
底中に松あうるるが悪ろ
松ふれぐて夕暮松ふうち
岩ふ両後の碑んあう効
ちが伊ちふ考ふうひう
いやう南紀にある玄ふ法
が拝平蛇ざうゝは日の
浄名



夏日即事
讀罷芬陀典深林人事
静目手門未開禪林坐
松影

天王山吹上寺　濱の所にあり　禅宗　本尊観世音　傍に行基の作

當山は古刹にして開基と聖徳太子なり尚ほ人皇紀年詳ならず

ちなめ吹上の景車坂の辺より建立ありしかの比京都心寺に屬せ

主淺野但馬守長晟の夫人正清院殿泰誉果悦菩芳大姉茶

毘の地也　この夫人は神君の姪聟君に嫁し五人の子

なんちなるべし此ところ近隣のろ岳にして此ちなめ

松樹茂々林と成り　ろの比は地にうつり

ちくしちろふんをくし頃の義皇上なるべし旧名この地と十

本丸

松龍山光明院普門寺　左田の町にあり　本尊観世音

大師堂　傳云行基の作

あるべし　四月八日西と

稲荷神　弁財天女　阿弥陀堂　本尊の左に地蔵堂

にあり　須賀社　寺内にあり　飛沢　奇石なり　秋葉天　本尊の西にあり

光明院

連理松

庭松颯颯也亭亭送
夜聲箏好雨星雙鶴
白一牛青清風今被
幾人聽

十畳の
景や
雛あそび

麦林

連理雲　國祖君の御墓所の松に數枝庭前の松に七枝樣まろ四ろ枝ち西二十五ろ南小十五ろ東ろ初田ろ粉の路
土所何ろ四ろ枝ち北所枝雲町此四町ろつるろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]

吹上

日 後鳥羽院府城の西南をつくまる山とす

此吹上の濱とつゝき西南の風烈しくたゝきて白沙風高く吹上く

一夜のかぜに吹あらはせる山とす又高くしぶき移る吹上に

ゆきの平地となりて常に風ふきあがりて

上のそらにつゝみ月の名ところ〳〵文花

古詠 ゆく〳〵あつさを年業四ゆく〳〵ゆ廢して蒼海

三ゆくび桑田とかるみのなるゝ今は其侍さへも衛士の夢と連く

生る月も家より出く家の入の風にかからぬ

清少納言枕艸帝に 濱ハ 吹上の濱

後拾 都にく吹上の濱ハ人とゝまるべき懷圓法師

新古 浦風の吹上の濱のそゝちより波立てし夜半に吹すり 祐子内親王家紀伊

日 月をすむたかにてたきの國や吹上の千鳥鳴くなり 摂政大政大臣

日 ちよたる波の音ばかりあけの濱の秋の初嵐 祝部成仲

新勅 吹しあれば櫻ちるとゝ春風の吹上の濱に雪ぞ降ける 家隆

日 波すゝる吹上の濱のそゝ風に吹しもいとゆきそ降りまさる 前参議教長

續後 都にくいるかゝん紀の國や吹上の入の日の入の日 藤原基綱

日 沖津風吹上の濱の白ぬるに波すゝのかる秋の夜の月 稙中納言實雄

日 よゝもに吹上の濱の風ふきあらくまがのくもゝ 定家

新後 久しきの雲井にかゝく沖津風吹上の濱の月そさやける 法印寂信

新千 立波のそらあらぬ浦風の吹上ゝすゝあれのよのつま 宋入道前大政大臣公守公

日 沖津を吹上の千鳥よやさむさ吹上の入の入の入の入の入 白河院御製

日 吹上のくゝのまがの波ゝ清のちゝうあるものゝ三条入道前大政大臣

日 沖津を吹上の濱の塩干ゝ雲ゝ 光明峯寺入道前摂政左大臣

日 朝夕ゝ吹上の濱の風ゝ吹けても 四融院御製

新續 さのゝや秋ゝ宮を沖津を吹上の月のかゝ 嘉陽門院越前

堀百 沖津を吹上の濱の寒ゝ吹上の濱の千鳥 永縁

南五

たかとりの峯の風の吹上の浜よりふる白雪　源資氏

支木

吹上の浜風さむし波よりは雪ふきまさるもゝ千鳥かな　太藏卿有家

同

きのふやさ吹上の浜より生しく雪の塩をうしたちぬめん　慈鎮和尚

同

うゝ遠く霞なりなる塩風の松すゝしの吹上の浜

同

月新しよ雪もさらくゝふる吹上のさゝ　前大納言為氏卿

同

寿風の音ゝてゝふるさの岡や吹上の浜れ秋やさらゝん　後久条内大臣

同

紀のくるやあるのゝ名やの名ひさし吹上の千鳥月よゝ　鎌倉右大臣

内裏名

裏の後のなゝもゝゝ吹上の浜よ霞月みん　後鳥羽院宮内卿

沖集

桜さゝ波もなるゝ沖津せ吹上の夕これ寄のゝさん　俊成卿

紫禁

夕ゝ雨ゝ雪ゝ浜ゝ別ゝ吹上のゝ　頂徳院御製

散木

きのふの吹上の浜よりの白いゝらくゝまの粉とよゝや　後頼朝臣

山家

波ゝる吹上のくゝの箱貝ゝたれつゝ見むろん　西行法師

月清

きのふや吹上の浜よりの波のゝゝたれゝゝ　後京極摂政

飛鳥井

夕寒ゝゝゝあゝゝ沖津せ吹上のゝ浦の雪の寄波　雅經

藤女

白ゝのひゝゝ浜ゝ吹上の浜のまゝの秋の後の浜さ　雅有

家集

白妙の雪吹上の浜風ゝゝとつきゝゝ過ゝゝ　爲家

家集

吹上の浜風ゝゝゝ浜ゝ砂ゝゝゝゝゝ村ゝゝ　師兼

家集

吹上やゝゝゝゝなるゝまつゝゝもゝゝゝゝ浦風の色　權大納言為尹

千首

寄寒ゝ松吹上の浜風ゝ松ゝゝゝゝ霞ゝゝゝゝん　宋雅

白題

吹上のゝゝゝもゝゝゝ夕ゝ新ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　頓阿法師

家集

ゝゝゝる吹上の浜のゝゝ風ゝ岩ゝ波の声ゝゝゝゝ　宮内少輔藤原光經

西槐

寄風の吹上の浜の後ゝの月ゝゝゝゝ霞ゝゝゝ　榮雅

名寄

ゝゝゝ又花ゝあゝゝゝ浦風の吹上ゝゝゝゝゝゝゝゝ　兵衛内侍

建保

名霞花ゝあゝゝゝ寄風の吹上の浜ゝゝゝゝゝゝゝ　定衡

同

沖津風夕波ゝゝゝ吹上の浜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　行能

同

ゝゝゝる吹上の浜のゝゝゝゝ都の寄ゝゝゝゝゝ月　康光

建保

すゑをくく立たくく波の霞にもまぎれぬ雪のあけの大屋　後柏原院御製

雪玉　春風ふきあらぬ色をたくへ来しいよをくふきあけの屋　實隆

月　はつかりのよもの砂吹上の山岳に立うる紀伊の大海原　正徹

竹根　とんの間よりよしのの浦せの波上にたるあるの夕雲　耕雲

六帖　きのくまの波上の浦もとまりとなるとはなるん　無名

廬主　紀の国の波上の浦の月は面白し

この浦に天人のくるよくらてあるとつくるかるもの

霜　つくるくの有のかれりんのあられの浦のうれもけろ

田鶴　つくるくさびしく田鶴のうれもけろ

別業　はくくさとのうるくぬくのをともおのまと

別業　はくくもむうるてうるくしくえ

天の戸を波上の浦に立ぬ人のつくるあるはそ　廬主

四条大納言公任卿集にを波上のくるよくるくの浦のつくるを波上

きのくまのなるひくのあるの浦のくるくるくの浦の

はくくるくもくあられるくくるくの浦の

わかくるくの波上いわるくの浦をとくん　公任卿

和歌寺第三世宗昭上人紀伊紀ノ州名草の郡の金剛山

玉やくん高山もみび浦の波上のあくのむすび　宗昭

中納言いてやうの京極殿と世の中ゆうてのくくるくるくの接

おくくゆうゆくくくのた縁中納言のくくく

四条大納言
公任卿の上の
佐ねの後氏公任卿の
小倉山荒大臣家れの
序孫れ忠の序るよろ和歌
の七人みくくこ三十六歌仙
朗詠集と拝しなまて
ろう

[illegible]

きのくにの吹上の浦のあしたづ　大将

吹上の浦辺の芦の名残ゆゑ　中将

[illegible]

吹上や月に[illegible]　加賀北枝

吹上の一名[illegible]　若山松居

吹上の小野

続後拾　紀の國や吹上の[illegible]　後九条前内大臣

夫木　[illegible]

[illegible]　中務のみこ

秋の浦浪　光俊朝臣

[illegible]　中納言國信公

吹上の峰

玉吟　[illegible]

秋の夜と吹上の峯の木葉より　家隆

吹上追加

続古　[illegible]　中務卿親王

夫木　[illegible]　貞室

吹上る裾野の風やとみふへし　素登

吹井の浦

[illegible]

家集　[illegible]　藤原清正

[illegible]　右京の[illegible]

吹上の浦の五月雨の名[illegible]　盧主

[illegible]

家集　服のうこのとりのまつかぜのちりにあくこそ
月のかげのとりのまつかぜのちりにあくこそ　盧主
支木　芦間鶴もとしへのあるこそ長たれとあしのあの浦よるなく　寂蓮
御集　芦辺とりの汐さしてこそ風ふけの浦の田鶴を聞くなり　順徳院御製
なほ考侍べし
わらこの内の吹井の月はよみちの水　其角
庁よりもさしてこの吹井の響　乃古　岩翁
細ちりの吹井のうしやつをしるれ　横几
細師の巻　形なるらんちりば
支木　志ほを吹上の浜にあくあしの葉よりあくるよみ人しらず
吹上八景　従二位為久卿
雑賀晴嵐
嵐にはさらの浦のあくれば細のもとにたくしほつる
妹嶋夕照
入日さす塩瀬のさしのつもりあくしほもへさて
吹上秋月
空もはるもれすやすむ服の秋風きそふ吹上の月の大海
飽浦飯帆
すむさんはるあしの紀帆のこくうとなりくのあとの浦を
名所山晩鐘
名所山梅鹿のさしの夕波もこるあるつりあいろの
紀湊落雁
沖漕ぎあとの帆のあけく紀の海のこるようもよるく吟
形見浦夜雨
わるこやうこの海士のこるやこの浦ゆくこの
藤白暮雪
夕日や雪の降るのこれみて沖はとこたきうるん
吹上の汐干　世俗荒濱
この上巳の汐干はいと吉ようこそ侍れ
淡路へ行んれしあくこ手毎の魚とれて大名
の奥方も素足くのすそをうけ紙の女は西の赤うこをうんせく

吹上の浜
汐干

春宵一刻
價千金花
有清香月
有影

肥後北里
一平

毛氈と
そのゆ帆や
汐干潟
鬼貫

上り帆の
淀路大るれ
しほひ
去來

汐干にかの磯に行貝を拾ひてより大浦とゝるまで人
たゝぬ所もなく茶店茶亭にうりをあらせし絶まく者
色にふけりて出てゝとゝわとる

帝の祝ひ菊の花の宴あり かくてしようこの代に成する
ものの多く名花もまた後くるをば古来伝ふる正徳
享保以後くこれを培植ること漸々行はれ今以繁昌する上
古は唯白菊あるのみ然るに今は大小菊出たれり
我邦菊の一変せるものもつて千態萬色あるごと
ものす 近世すでに小菊あるひは中菊まさに紀州
菊もつてこれを上古の遺種にして正菊なるものを按ずる
花鏡に九筒の弟に載せ曰く淵明の賞鑒なるところの
ものは越人ほぼ大菊花太ふくして心黄白瓣濶二寸
半 昭本の一寸七八分にあり 花香なほ異なること尤も紀
うたれあり後文上巻

かくて九月九日こゝにくさぐさの菊みたりとて
まるこくうたりまんせのさて赤は紫檀
ぢむゆひはうぶむのくさ白銀てゆひくこうゆのうさ金砂
ろちやうとはちるまちうまちうはちくはくはうはうろへる
ぶちやうのべるちやうさこむまちう紺青緑青ぶちやうのぶ
たれやうちうその日乃はくあてはかとそうやさやくはん
まのうせなたんこのはんのあいをうとなんあうたる
きくふつけうたるこう
あきつるあるまちうの菊とはうてたるうとうとうみるもきこうあ
みぐ仲秋とてくやうちうはりうう
ぶちうたるたるのはうのうのぶのひうとうろうはくた
秋はたちの菊はもはるのとあるのぶをちふちびさけん 式部々のみこ
菊たのようのようはうこうもはいはうのさこうちうぶのうん 中務のみこ
ちう菊の枝うそのうちはあんはいとはうはうはあるう邦 兵部々のみこ
ちう菊のちうぶはあくまちうのうはうぶくたるう邦 左大将

寛平のきゝ付てこゝろ菊合たすくるとたゝりてきくのふくうさらりとくらくらけうとふきあけのたゝのあり

古今

秋風の吹上にそる白菊はながれてとまる瀬のあやなし　菅原朝臣

夫木

花ゆゑに菊のえだをこそ吹上の瀬のあやなし　從三位為實卿

同

あた風の吹上のたゝの白菊はながれのよるる花ゆゑ　素性法師

柏玉

白菊のゆゑよりたるこの葉やあたゝを吹上のたゝ　後柏原院

雪玉

たゝく世の霜ともまがふ秋風の吹上ゝ秋の白きく　實隆

家集

たゝ屋のゝ吹上よりたるりかぐさをしかや菊の雪の旬てん　宋雅

艸根

吹上の浦のたゝ波も白菊のまさうろ花をまくへふ　正徹

自然斧発句

たゝ屋のゝ吹上あるあしのきく　宗祇法師

浪紀菊を蛍ゝ　干布　槐亭

吹上神社墟　府城の南吹上れ方浦への注ぎるる大岩氏ちる屋敷の庭に古松あり

西行山家集云　社地の京りとゝ二本松のりたありこゝ人りしこゝ

待賢門院の中納言のるをとて成とて高野、麓にあゝのこゝ

山ばとるゝ[illegible]院の郎の法ゞの都の外の栖こゝにまてこゝ
こゝにはなしたらたるあり[illegible]
ふたゝびより出あひらけるに粉川へまわるに
粉川へまわりたらるかるにはつゝゝをあるまゝたる者たちう
吹上こんとゝゝぐるらるにらきるゝ吹上へはしたら
道より大雨風吹くきうなく成よりうとゝゝゝ吹上
ゆさはさらにはもえ所ちらうなく社よ乗うたゝへく
やつよも俗さらなり外国ちなつゝ見たゝせこよゝゝ
ひはくらはるゝねゝをはりひく社よ書付ける
天くちゝを吹上の秋ちらの雲ゝのそひうあゝ
苗代ふやはゝさゝ天の川ゝるも秋のゝるゝ
かく書付ちうきゝゝゝ西の風ゝさうちうくたちまちふゝそう
ゝゝくうくく日ゝゝゝ末の世ゝるゝゝゝゝさうゝゝる

ゝはゝきうゝゝあゝなるゝゝゝゝゝゝゝゝ吹上
わゝのうゝゝゝゝゝゝゝゝ

吹上の神

春をへて年ふりぬれど万代を君にぞ仕へ千歳をぞ経る
[illegible]も三の春をへぬれば　ちゝまさ
ほゝえみてわむ春をあるものと指をりけむ君にぞ　そゝまつ

九孫まつ長者

（うつぼ物語吹上巻より）

かゝる紀伊国むろのおほうみのたゞまつと
つゝ長者うたりをさきとしつゝのことにくゝ
人にくかちきゝみみてんにさゝくあり。そのうめたそい源のつ
あるこゝかるる。大納言のむすめをあよたむことをあゝなりけるを。
おのもちく親も先ひく世の中にすこしたゝひそるに。
さまつなんうくそめりたるむをあ一人あり名は肉の
ゝ人にうまつるうたゝた源氏ひく正むまをひけり
たゝうゝおさくうりあゝうくきちゝめさたゝろうとすれり
にううゝまとおうちういこよをう吹上の浜のうちにひろく

おゝうゝたゝをえゝひもゝめく。今ことむるうのおわ殿をたゝり
みゝさ四めん八所のうちたゝこのうゝさゝ。ゝろのつい地とゝくう。実ろ
うちまうゝゝたおくゝゝ代ゝうちんゝをそゝんをゝ。ゝろゝい
かゝめ。おくゝてきゝめ代ゝふゝくゝゝてこむく。ゝろう。おゝこめるう
のおわ殿と造ゝうゝさゝ。ゝ代めゝくめゝうていんゝちむのゝたい
春の山。ゝるゝこのちむのゝにいゝ芙のゝきたゝのちむの戸ゝい秋のゝ色。
北ゝいおのゝゝ中。おゝてゝとめゝうゝくゝうゝる草ゝたゝのすゝゝ芙
さたゝる花の色ゝ本の紫。ゝこの世ゝ中たゝたゝむゝゝうゝ海ゝうゝね
ゝうゝまゝうゝゝゝゝゝあゝふむのゝあゝゝあゝゝゝゝゝまゝ
たゝゝいあめのゝゝゝの国ゝたゝ形ゝ中ゝゝゝゝゝこゝゝの国
ゝまゝてゝゝゝおゝゝむゝたゝゝの王ゝゝ中界。かゝくゝのゝきゝのゝゝみ
ゝゝ形ゝゝゝゝゝあけのゝゝゝゝゝゝゝゝ東いゝゝゝ也。
そのゝゝゝゝゝゝゝゝ

吸上の
清ら
さう長
者乃
館

[illegible]

[illegible]

[illegible]

贈二位宰相頼職卿の御母君

真如院殿御座所殿ちう歩ふ　真如院殿御在世の時

常に御の浄刹造立の御志願深く在せしかども竟に其のを

果しなくて世をさりなまひ給ふ第六代の大守

従二位大納言宗直卿の御ぶれに彼志願の遂させ

たまひかしこ寺を興さわやかしてこに享保廿三年報

恩寺の末頭僧都日従上人に命じて開山御殿乃地を

其まゝに寺院とかたうしるべりかつく若干の祠堂金ゝよせ

たまひ荘厳日ゝ逐ゝいとも輪奐ちう

白雲山報恩寺　日蓮宗　本尊　多宝　首題　釈迦

脇士　上行菩薩　四天王　脇檀　左　右　方　高祖日蓮大菩薩　弘子長三尺作　宛文十一年

九月草創の時　日　方　瑞林院殿尊牌　御霊屋　位牌堂

鎮守二十番神祠　鐘楼堂　上宰寺　西南にあり　祖廟　共に寺内　南にあり

瑞林院殿御廟　仲門の正面にあり　御成御門　是すなわち表門なり寺町ちう

當山の起立結構とたがわる始　國祖君南龍院殿御夫人

瑞林院殿浄秀日芳大姉宛文六年正月廿四日ちうつく東武に

掩葬まゝ遺骨を奉じゝく当地の南の上要約寺

みつまゝ納めたまひて茅二代の左守　従二位大納言光貞卿

御母君御追福のためとて深くまゝ御ゝ修ゝ幕府ふ

達ゝ要約寺の地を改めく新に法華の精舎を創建し是

と白雲山報恩寺と号しく　瑞林院殿の御菩提所とな

たゝたゝてに於くく宗旨を撰んで日順上人を命じて開山

導師しく永世無本寺にしく當国一宗の僧録に定めひ

寺領若干を寄嬢人扶も開山権大僧都日順上人とゝ

本藩の士石野昌良ちう子ちう幼にして父ちうくに幼の

邸中にあり牧　大守の恩寵とうしもう六歳にして出家し

甲州大野山三世日性聖人と師とし給ふ学して亮展しつつ
性温柔和平にして人と愛敬するひとも聰明頴悟にして
風ふ法華経誦讀し給ふ外典も通達し給ふ十三歳ふして
さらに志を大にし下総国飯高の檀林に入て学業すること
五年ふたゝび移て上総国小西の学舎に研究すること十有年
通計廿有年にして学成り内外の書ふかく該覽し給ふ
たゝ尚ほ江湖の僧侶上人の方に歩るものあることふし然るに
ゝもこれ
日善大姉市左世のあとに資給ふなりしところの
力によりて法縁のふかきことを
たゝ尚ほ上人に請ふて開祖ふたゝび尚ほふ
住持する日　衆内を免さるを推大僧都に任じ給ふ
時に廣徳家
ふと称す
幕府に向て請して弟子　尋て延宝三年八月東武に下向して九月朔
日　市時服と妙人をすゝめ尚ほ

特にして黒世住侶文代の永式をたゝかく上人自享二年城東
安原荘相坂村の古刹に退隠して自ら中興して慈供寺
と号す　紀下にいたる安原の終り元禄元年九月十日世寿八十四法臘
五十九にして寂をとゝめしたまふ
什寶　高祖涅槃図四幅日親聖人本尊重乾遠三幅對曼
茶羅大小二本　吉宗公市自筆私考　光負卿市自筆提婆品
并画　宗真卿市自筆法華経　養珠院殿市消息
瑞林院殿市詩歌　開山絹紙金泥大本尊　歴代本尊
古哲本尊　牧牛　大涅槃像　古金銅　大本尊　市寄附　高盆の彩表裏
日蓮大士市作大黒天神　赤栴檀立像　羅漢
佛作　仏法大師墨跡　陳子昂墨跡　此外古書画数多ひ
宮方方寄家市寄附の市手迹多く未枚挙するにいとまあらず
善曜山蓮心寺　上寺所南角にあり法華宗寶蔵　本堂　國祖　前亞相頼宣卿　市造営
于豆州玉澤紅王山封

運心寺
門前の桜
向ひ
桜
近江
文素
大会堂
王林坊
方丈
本堂
長廊
玉泉院
玉泉院
表門
裏門
松陰亭

白蓮院
東本院
沢庵堂
大会堂
長廊
松陰亭

祖師堂　本尊の西にあり弘法大士の像
すなわち俗称中老日蓮上人の像
本堂のにしにあり　鎮守開運三十番神祠
養蚕夫人作なりその他　釋迦堂　本尊釋迦像
親加　鐘楼堂　位牌堂
開山普照国師の像　黒書院
本尊弘法大師像　親鸞聖人像　仏七尺坐禅の他
板本尊　聖徳太子像　上人の像
養蚕夫人像　法華堂
左の檀上に　神牌を崇敬
子院七區
狐塚
当山の豆州　妙法寺第十四世良應院日産上人
第七十四代目
一宇を造建あるべしと云えり立年
國祖君　沖入国あるべしと日産上人の　芳命あり
こたえ申す人別紙貴諸堂寮會方丈等ことごとく
造営すべき国に移りての用意なり林泉の青樹多く
風景殊にすぐれ春は桜花盛りにくれの月清く

夏は庭中の池の面に水仲望み秋を李林の月皓くて
すべてすべて気脇にすがいゆたの日乃明を
四季ともかのうるおくちくの風光斜にすばらしく
慶徳山妙法寺　祖師堂　尼師堂
当ちいん名仲那和尚の住よあり二年日栄
上人ここに移り中興の開山
法性山本光寺　大室山惠雲寺　鎮守三十番神祠
世尊　法大師の像
照信山地蔵院三光寺　観音堂　本尊十一面観
詩山寂善寺　本尊釈迦仏

大智寺
教恩寺
法華寺
大慈寺
宗慶寺
法華寺
鬼子寺
妙法寺
妙法寺
吉原寺
延寿院
本堂
経蔵
大師堂
大黒堂
延寿院

寺町や
門さんたちの
紫の花
祐昌
大たさし
地あん
新あり
麥林立
観音堂
天満宮
三宝寺
法華寺
妙法寺
法華寺
法華寺
法華寺
法華寺

鎮守社　稲荷　若宮　八幡大明神　遠州より

当山いにしへ永年中　野外伝察大和尚　永禄年間に開山　養ふ　猫の奇怪のこと　縁起に見えたり　天正五年　永昌の会葬　何物なるか

増上山仏境院護念寺

本尊阿弥陀佛　長一尺八寸　開山沈枕頭抱持寺に屬す　脇侍観音勢至　以上こゝに

服士

信仰あつのこゝろの城こゝに山果報法叶うべく昔

年妻那山上なる小川七郎右衛門村民とゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蜀江錦五條袈裟

東照神君市在世の折り[illegible]君に[illegible]
[illegible]中真念善玄冨上人[illegible]
[illegible]東[illegible]獅子寺大善上人[illegible]

深信山大恩寺

日蓮の[illegible]
法華宗[illegible]府場上寺に屬す

幸善阿弥陀仏

[illegible]正れ[illegible]座の[illegible]作
[illegible]て長三尺二寸

尚白古剃[illegible]寺記[illegible]

[illegible]近世寛永年中

國祖君南龍公の顧命[illegible]

[illegible]採委寺[illegible]

[illegible]

[illegible]寺門[illegible]

上人の法徳[illegible]

幸善の士山中何某

壬寅上人寺護幸善就鷲[illegible]世尊

沙門正辨阿弥陀如来

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かどさざめ儀のそばにて越けるうに横川横川かくらつるくろに探要寺くろ
のありろるぶ寺ころの住侶懐巻上人くらつるろ風呂俊の尼多別にしくくあるの
偏寺ぶ住ひに法道ようちり俊後のかぶ生ぜさろいちく芳名皿流にるくくある
くた上人他に生ひかひしたとある山ていの雲ぶ村より嬰児のちく考ときこくぶ上人
あ中くれかりて俊ぎ見ふるたこ条だうるる幼よの乳風ようり今ときのひろと
後ちたるたくふる大脚のちのうたこ条だんこじめだうくちこれ慶村ちる光景るぶ
ぶちるる上人へと逃りるやちくづくくもちく色さうめくの枝恰も上人とこちわて
うの児を接るのくごくくたれめくく怪ぶる食ぐてうの児とつぶた下さくめ
ちまくるる玉のくくたの男ふにく腰間る綿のうろを佩くうぶひうれすちるいち
けちちろうでちちる上人ぶくくこれとひくきるくるへるるぶ一寸八ア分る間
浮檀金の光景巻かれにくぐまりくくる上人いあゆりのあうぶくさに嵐優くく
めうひくれくくまりるぶ紀くすみちうくうへべくもまだ妙のこのちくを
家ぶさぶけくく法嗣くみさくめちんぶたあうにに勢ちちをくくくくたいくしめ
たまるちうべくさうにくくもいくいるるうのくぶるるやくくくもちくでぐやく
のくくんくくの俊るけまぶくれうり法道くくにるるくれ彼ぶたうちきこえこのおぐる
法の周傷ちりめくくくれ眼くつひにくくきにほくて後ちうその紐ちもきこえべくうつ
るる霊仏ちも有ままくれ和ぶ色と家るりのすくるうにくくつにた法げくれおちくく題
とれぶくくるいけるくれ仏くく果くくくくるにたまでもつひりてくやく
霊仏の奇特ぶんんぐぬりのくくそちうれ歩るるこくんぶ母わくくれ幼ぶと朝小
てちくくくくもちくれ枝ぶくまるこくくひて家るくれ幼ぶをにのるまを
ぶくくれ人のれぐうにたのるれきくくくくうくやくくうるものもまに
ぶ家くれ別るくくくく

紀集山大智寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たまく父母しまのたつまを元生ちるさ〜めるくさうるやうに除ふるよ妙法とまづみしてと
れに共報をあらすべしくあつ〜ぶ仏分堂中にたくくしを老
下る滅ぐとそうく〜修為白浪みきうきうに形をあらし少けに卒あるを
しはのおくあるばけがくれわれくのいに共兵と強し四天王恵上人と三ぬ〜ぬて禪底
に修〜めなまつるまはけらる面ようういぐくいにに戒載上人と三ぬ〜ぬて禪底
にどつにるくちん上人則よくあまはのうちに
拝礼その返拝会ろろらく〜こ文をんるのあらざるを

德巻上人の令とうけく拝栗寺に住〜つるのあく法幢
を竪起〜して三百有餘の江潮の大衆を領せし偉に論
講の梵規とあふやうをより〜〜弟名四方に高く法
徳天下に普〜五つ　亞相公上人仏師〜なるく
あさうだ絵と南紀と詩く大慈寺を再建〜これと中
真〜〜め鼻〜尚ちと創立〜て開巻とに共崇
徒〜なるふくのぐ〜法腸や傾くにれとんでち務
の外弟といふ隠遁のれりい最ゆ〜逐と志仏決して
泉州堺大徳寺に退隠にちるに遠徳の熟とるところ
ちぐく高陽霊験のく多ろ初入院の日開山光と道て

物言く系尚ふ仏ふく絵烏の地とやんと若狭国のところと
竹〜あだ境域の内蛙鳴ときくこと〜めたまへとあ
ア〜に當日ようして庭中なる蓮池ふ群るる粉ふ蛙
ふく彩と林ふく後ちくおるる〜上人ふと仏号仏事
修〜日に大徳と課ちるこ怠惰こる〜つ多に世尊
寿如来陽字の仏ふたまへく見〜ぐこれよ已こ
六根を仏わるぐおく往物の未爾未然と察〜縁め
人を覚示〜てこまぐ徳へを多さ〜めさ多こ〜も遠ふこと
ちく〜人ふく神〜ふかるゆ人ふ芸利芸仏多るの縁
ふだ自然の仏号とちくころ〜ふ〜ふ上人と崇〜〜ふ多の縁ふにも上人
ア〜ぐあろく〜尚ふに絵ふ〜ふ泉州堺寺とすぐろ日ぐふ
ましてふう賈人ふ〜ちるくゆ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ぐ志ろるふ修の巻のようふ一回の織あふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
そを下と弼賈人いふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
織いちるあるふまふ集いるるふ自巻〜てふくすこゆ〜ふ
ふふ人ふあ〜ぐ〜〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ

[illegible]

嗚呼流涕の世上人の迷徳を大なるうらやましきこと

あうがうたうの

曹源山大泉寺　上車坂にあり　本尊聖観世音　赤檀木にて立像七寸

[illegible]　曹洞宗　峯雪良嶽大禅門　俗名我十郎　成二十二歳　士山良富大居士　俗名は九

[illegible]　服檀曾系兄弟位牌

[illegible]甲州大泉寺と本尊二十歳　○　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

松王山延寿院竹林寺　新義京智積院末　本尊薬師佛

服士　[illegible]　護摩堂

大師堂　[illegible]

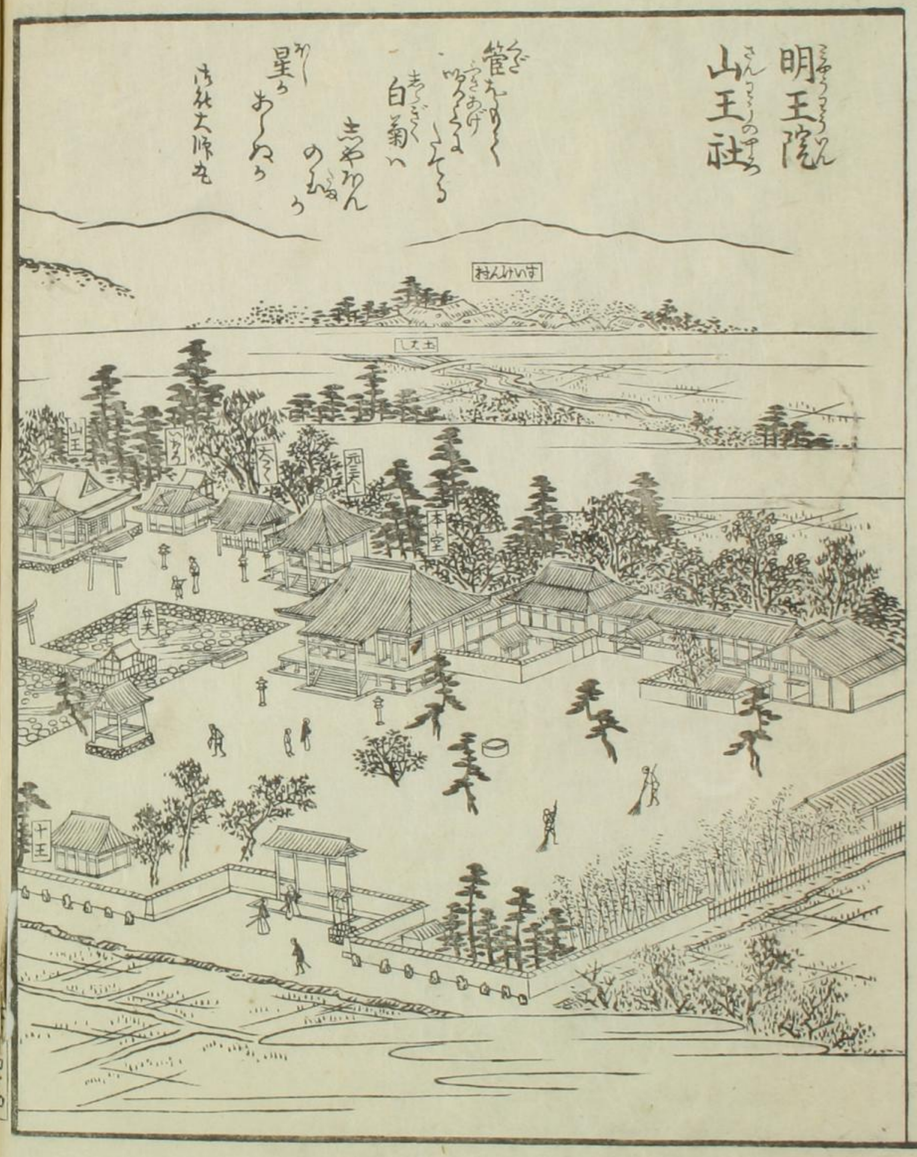
特仏堂　大日如来　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

梅ヶ原　[illegible]

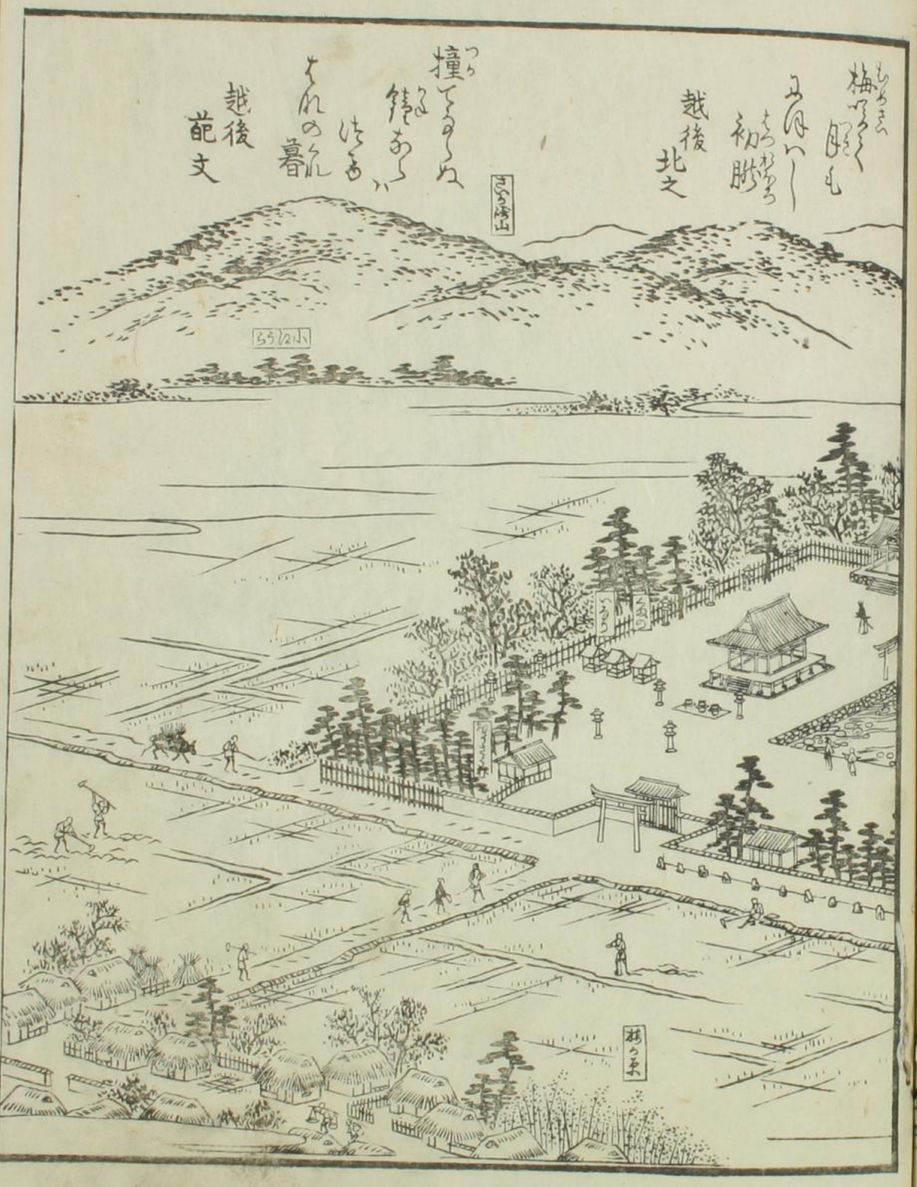
明王院
山王社

菅原道真

白菊い
きやりん
の
星
おしゐ
清林大師丸



梅の明
月い
初勝
越後
北之



撞
鐘
作
それの
暮
越後
龍文

瘦枝に花殘くなりこゝ公賞しく繪人千ものの落よ俗そのえげしとと云ん流生
のこゝろにく拙花ひゆるくこたゝぶんゝくこゝ
ゝ
谷風の吹上たる名木の玉陸堂なる雪やわらん　定家

梅花百詠　溪毒

一帶寒流碧湛神臨流芳樹見天眞搞衣映月沙
追鶴玉貌遙波鏡裏人自得皐蘭全奥味肯隨岸
柳共烟塵雪晴香動津頭路曾約漁郎往探春

自然斎発句

松ゝ雪たての下ゝ春ちゝとや　宗祇
吹上やつゝゝ春ゝ毒ゝ花　若山里白

吹上城代のゝゝ

保ゝ〳〵千木のくんゝ人ゝ乃毛　淡々

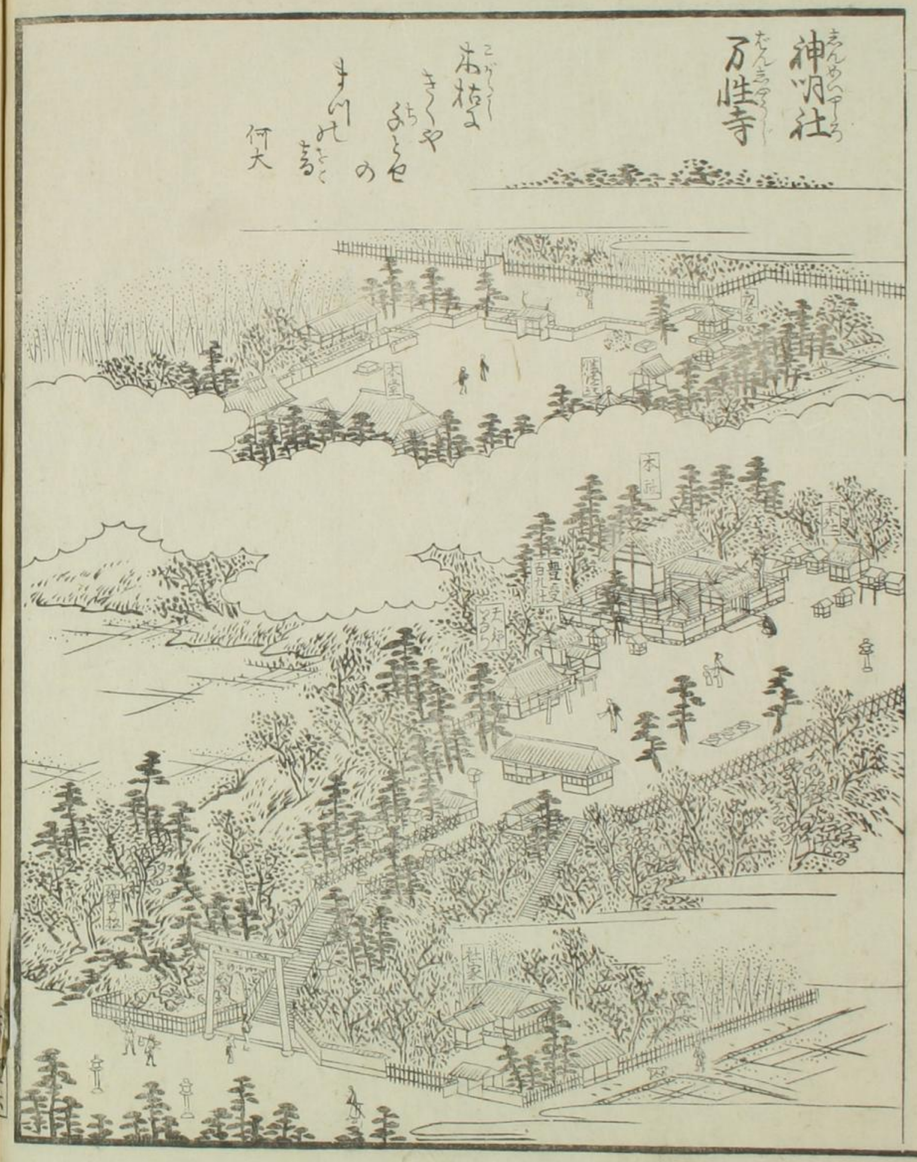
明王院　俗称村西に　本尊薬師佛　府城の寺後神
山王社　三神社　本社七社屬神十四社　合九社一社　自天保城上郎西況大
矢竹天社　四家の池中に矢竹天のこゝ矢竹天のこゝ

元三大師堂　本尊の前にあり法人　大乃のほゝくゝとゝろ　末社　疱瘡の守神　十王
當山冥基久遠にくゝ法ゝ乃ゝ　稲荷神　然や花淵
長次中真ゝくゝも日恵の山の西ふあゝくゝと万治年間寅

たゝゝ

今福神明宮　新坂西の所に　生土神　日恵の名もゝ

祀神天照皇太神摂宮　車代主神　寿日神　倉稲魂神　猿田彦神　大巳貴神　蛭子神　菟八神
外宮祀神豊受皇太神相殿　雅日讃　左座　一國一宮社　十八座　右座
万宝壇三十二神　秋葉神　天満宮
富士浅間神　都合二十四座　供奉神　金毘羅神
祇園牛頭神　神摺松　別宮末社
當社の舊地は府城のゝゝ所謂ゝ上の神ゝ海中ゝ
ゝ社ゝ四方便利の地ゝ
ゝ山の形勢ゝ日恵の山ゝ
ゝ山の西ゝ
ゝ上の神ゝ
ゝ皇太神ゝ
ゝ皇太神ゝ
ゝ皇太



白道山万性寺幡隨意院

作者上人墓　本堂の西

尺六寸　弘誓堂　本堂の南　幡隨意上人

相模國長澤の郡若行寺村川名氏なる又い和上野國鈴林ふ

居しく即ち川嶋七黨の魁にしく小宝家の嗣裔なるのち民れ

州若行寺村に移住民なるふ夫妻つ子なれ民なる稔て然堂を建

にのうちなるふある後の業に然堂山に居く下向の路よ廣堂を

建るなるの大然ほうち追ぬうたまち化しく宮殊

くあり陸奥へくりくくの業に学民なるかくくく其のち懐胎の身

よいなるまう月満く天文十一壬寅年十月十五日出誕にこのとき

群鳥稲穂ふくるくく屋のうへにくく産門を於るとそ医

丸ニ寸の法ろ沙門をこそ弘法大師にて紀年を追い九歳にて

父母に申さしむ出家はんと願ひけるに
既に二十一歳の春三月日四天王像の二体ち仕倍義門上
人来りて告げて曰く昨夜五更の霊夢を感じ青衣乃童
子手に白い幡を持ちて告げて曰く當家の小童うしろに
立ち其由縁を問ふに曰く世の福田なり如来
三夜守護はんとあり帝釈天の仕者
なり童子よりつるうとんとく菩提心を起こ童子と
やしく左俗と垂たまつるをきにあらず仏乎法乎
玉ふ四海の万機導作さんとのぐるんと文殊を
相ふる梁の幼稚より作業をつとめ合く如来遊ぶ
範蠡上人より授戒上人易簡授戒〻〻彼蠡長者
の白幡に乗じ仏法を弘めるの
号たまへ其後仏の許を辞〻〻信濃善光山に参り

愁上人の室に入〻内外の修学通達〻超倫のかまを
あら〻〻法戰場に声とろ〻〻衆中あつく尚ふの道
ちかよりて三天年春三月寿義三十四歳にして物
に無名の切ろ〻と志ろ利の学道にいつ留
の外地まるうたかく幡但馬上人に会仏法のたあよ
諸国遍遊〻〻わ〻〻上州鈴林の刺史柳原弟原康政
の徳を仰ぎ仏教〻〻法の南山りん生院寺の開
〻て竹創〻〻ろうそ下総国国宿大野寺を
開基〻〻赤と辞〻て越後国志田郡善導寺を建立〻〻
より若七七寅年作六十一歳に〻〻仏所寺に移院三十
伝織志ろ〻〻宗衣を授ろ泰風浮家の秘伝を授
たまへ日九年七徳山百万遍に左〻〻北道伝壁ち寿み
ちの〻〻関東に招ひ申〻び林四の巻〻〻とたまひ

浄刹と受建あつく神田山新智恩寺憍隨院と号けまさ
ば十三申年武州熊谷村蓮生法師の遺跡なり其堂宇の荒
廃ひろと造建しば十七亥年芳州山田のさとに隠居しく
つろを創し入門寺とのまとうして九州へ往廻しなる付よ七月
赤間ヶ関にく新仏と化愛しなまへこと遠国の其ころ徳なる
と称ば立て後尚ものつら塔迦村五原橋をに茅ヶ瓦創
建しく閑居しなまへ時ふ疾病にわかるふ拜為ゆて
御宮の上にく唱とこりく上人此形よ向ひ十念を唱
なまへこくく亡る別時に熊野権現の意所なるり形
い神現の仮名るるば誕生入滅の始終よきこうあろまるも
まを不思議ちろこふくように諸角を表滅し上品往者の
将果再会をちぐうも婆婆の再しをと祈らんものうさ
祈く熊野ひる祈うれべしくとのひく操治社ぶして

西に向ひ筆とのもの辞世の偈を書しく曰
白道運歩数十年以火消火難思術
書畢く筆を擲て合掌しく眠ごく遷神し
なまへうしとぞ時ふ元亨元年辛酉五月五日歩義七十歳

堀留の眺望 油すうまの浦城下にいまろ入れるうまの東のうさに
れ中にあるこれも神四の宝ヶ門ヶすす
ふたし出ろりの数堂しくこのえさい法をとをれるり
門もまるにえ日にいるあふのだ
金竜山天王寺 上るれの山よあり 数堂 茅葺流 左るる子安地蔵尊 変速なる
鶴林山ふる松寺 ほ西の南にあり浅草曹洞流 永平寺に属し 観音 一尺二寸
当寺い考七十七年祥岳禎和尚の中興開基なり角の北尾拾拾碑文の有
涼しうなを魂しく魄しのいとなを山
なをたの業内とのむほくぎん

江綿舎吐糸

仝

堀留地蔵

油掛地蔵

世松千餘載の
俤なる古ぶるにて
枝葉あくも
蟠龍のごゝ

老松や
紙よりの神も
ましまさん

近江
春月

角虎山丈六寺

日蓮宗曹洞派
吹上寺町にあり 誉寺に屬す

なる丈六の阿弥陀佛

芭蕉翁碑銘曰

翁云 佗無古人と 世古人を此人嘗伊賀古池
蛙唫翁即是古人

旭岡庵春山翁碑石

塊亭風情誌

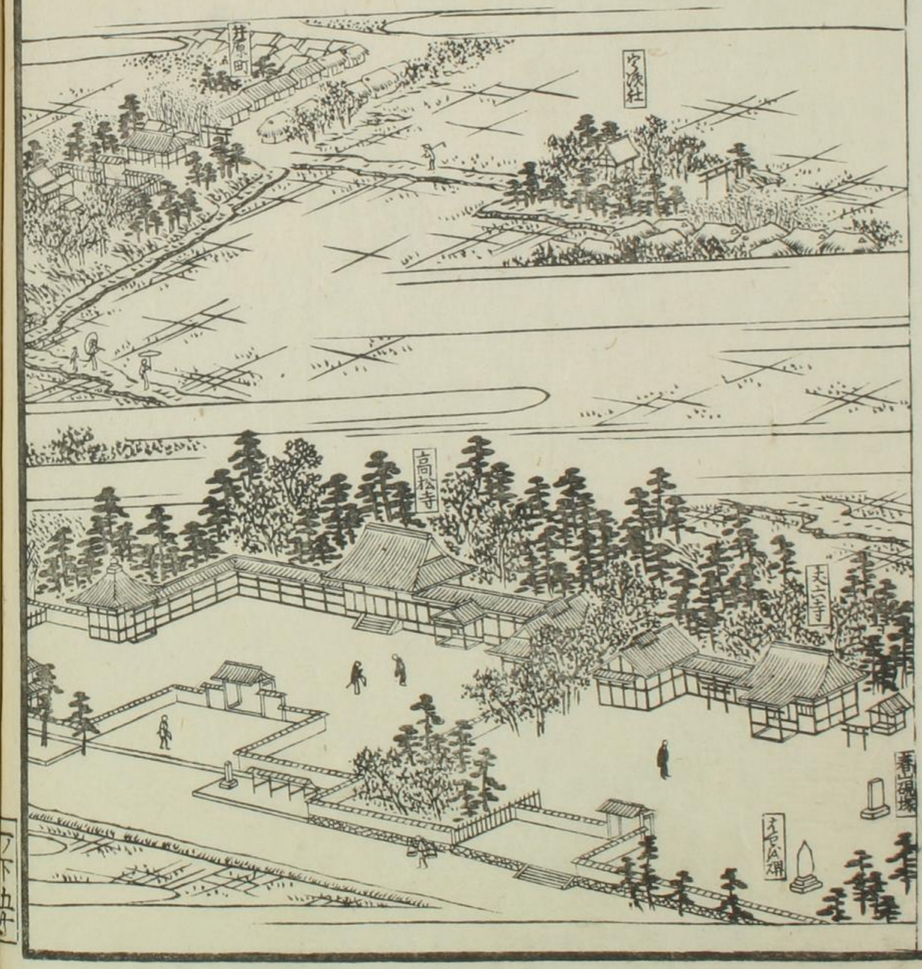
井泉神社

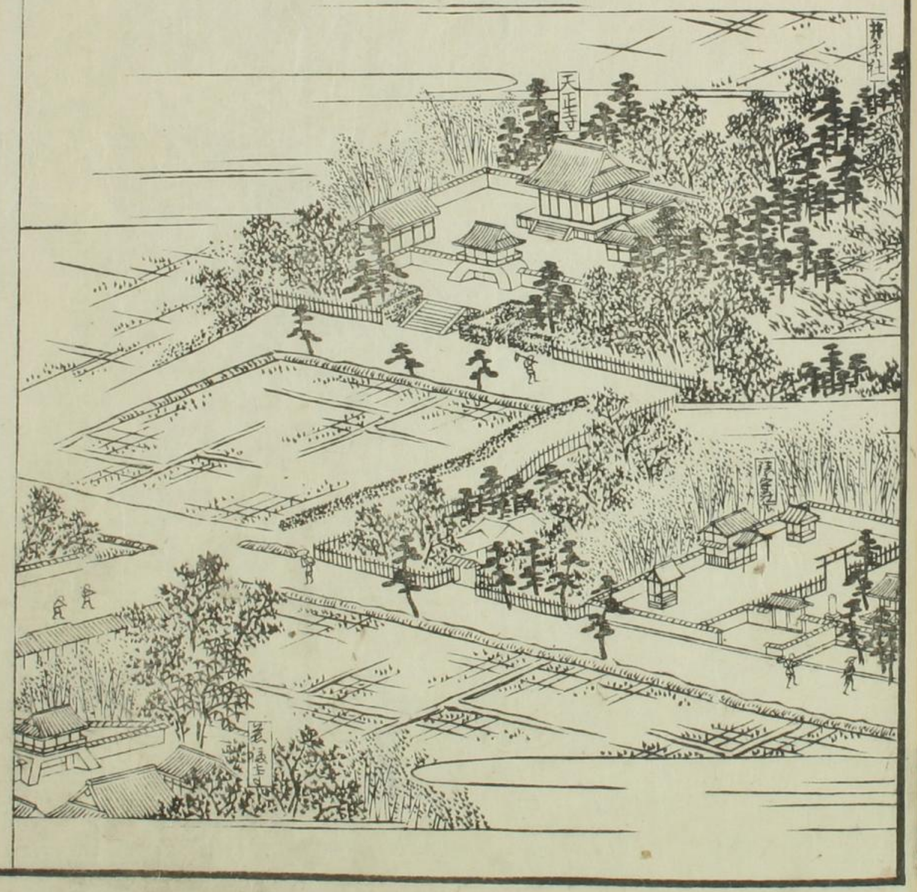
井泉町
生土神祭九月十六日
生土神祭は安永間若狭のくに井泉五郎を夫とするものある後の神霊告るよりのち投
井泉明神祭れ[illegible]造立して
[illegible]

[illegible]

[illegible]

井鳥明神社
宇須神社
丈六寺
高松寺
天正寺





三十番神祠　法内忠桂山の鳥居の西の　丈六岩　忠桂山の西の

當寺ハ　國君祈願のため造建あるゝ所なり精舍也嘗て

元和九年　國祖南龍院殿御違例こゝに甚しく危篤ふ

れ給ひしに此付　御母君　養珠院殿東武に在て

此事聞しめされ大ふ悲く歎給ひ真の玉駕に命じ

して御帰國あるゝ其後の御心労ひ給ふ乃ち

御使を弛く甲州大野山本遠寺日遠上人に護持の僧を請

ひ給ふに此者忠桂逝ふ應じ玉駕ふ陪

し奉る　當府に着て丹誠を凝し祈念ひしに未幾なら

ず御違例ふ復し所託虛しからしめふ

此道縁に依て宇の保刹を起立し長く国家の安全を

願ふ一日　養珠院殿御接を

受給ふ所の玉駕を用ひ給ふ

ふ此時忠桂を召て曰く此地の遠近如何ぞ吾懷を遂ふと遂

に忠桂を召て巷幽谷を探き焼

煙器を求ふ此中幽冥にして草樹茂ふ乃ち左右

に問ふ　国君の請に応じ此地の遠近如何ぞ吾懷を遂ふと遂

の料として若干の寺産を寄附ふ長伴

ちなみに上人に勅して一宇の南藩行宮の道場を

永く開堂傳燈の本尊を寫し安置ふ附る

真光寺山　村の西に町あり相伝へ山下に茅屋あり元和年間城国

東禅寺山　村の西に町あり相伝へ山下に茅屋あり元和年間城国

宝壽山光明寺　村にあり禅宗　幸ふる千手観世音　後に只二寸五分

鶴寺弁財天稲荷神祠　毘首羯摩の作

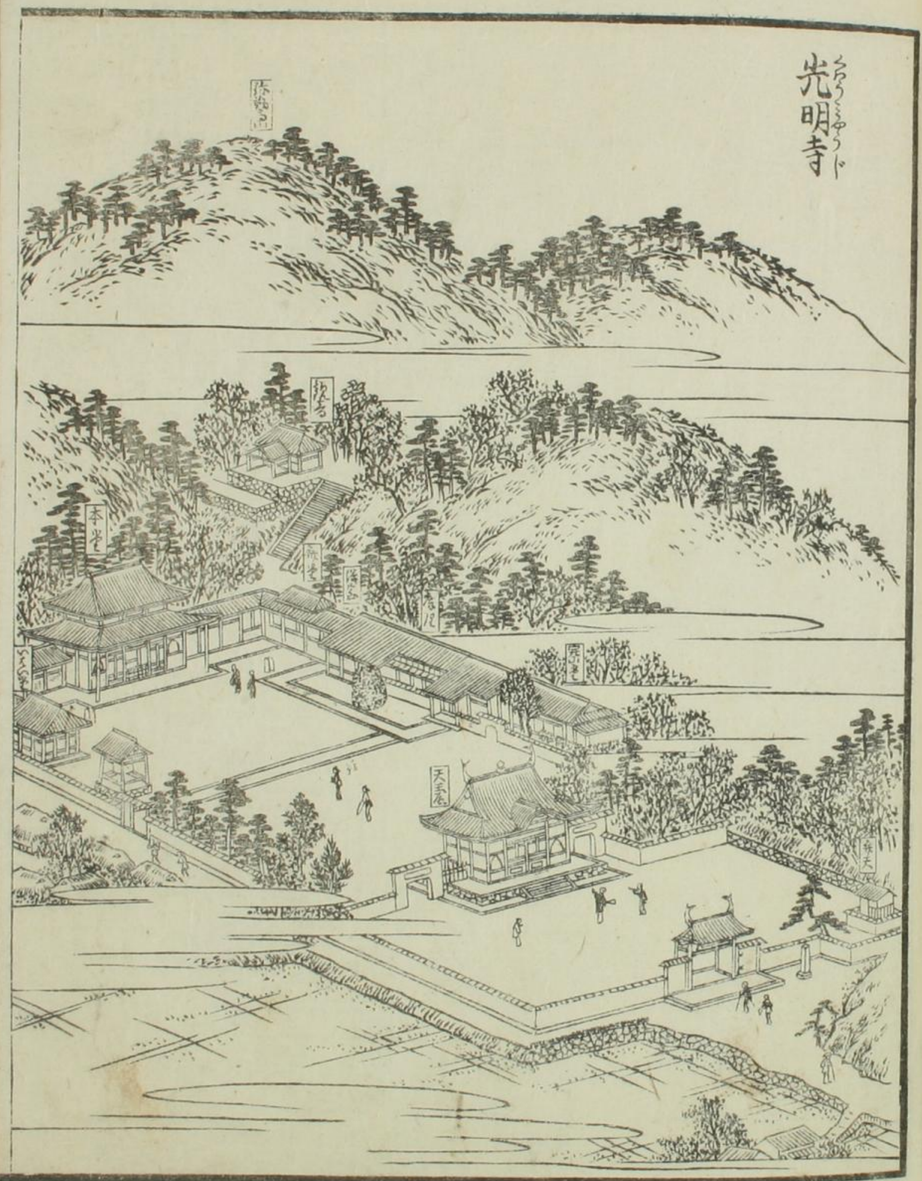
漢門　光明寺

占取メ紀南山ノ水　宏開ス濟北門庭

眼底有疑休縱歩　兩脇窟門

胸中無碍自通霄　聯也

通霄路



白雲関　門外已無差別路
　　雲邊又有一重関

天王殿　四天王堂の額なり　慈門現瑞大歓喜会度人

福地鍾霊特感聖護国

東方持国　西方廣目　南方増長　北方多聞

中尊聖慮太子

浴室

臭清浄未許便休

水垢頭涂更須洗

位牌堂

地蔵尊

無虚応　八十三翁圓通の筆

遥風千古播　支那国悦山の筆也

寿萬年長

庫裡　廊下

方丈　開山真像

禅悦堂

齋堂

得行無戯堪應人天供

清規有禪漫参龍象筵

同堂中

偷心不死時常滴水也難消

法眼圓明昌費汁金非分外

地獄何時空願海無盡日　金龍書之

衆生本即佛機轉有知朔

青蓮居　高泉

祖師堂

寶壽山　芙蓉狩濕

梵刹建成呼寶王壽無量

舊本尊阿弥陀今置千手観音兒首　竭磨作昔日在御室詣安置寺

祖燈剛起紀現瑞光永明　黄檗四代狩濕

鐘楼　舊吹上社之大鐘然仍序見多園通録下巻

観音堂　幸堂の西の丘にあり

仰塔場

ゆゑに同参圓通得師元禄七年の造建なり得所諱い道公道

圓然野の人にして其姓氏と詳にすべ芙蓉と笠置と那

獨湛和尚の上足にして道高く学深く行ふ所ふ
たゝび書を山人の須石岩に讀ミ暴く和尚慈光
潤〻もて緣提を立まゝ一日座を辭して
ゐるの家にゝ勿ちに暴燒発し原底に消滅して太
恬の時にゝ乃ち三の志誓願を發して圓外に出ることの
五年にして諸國を編歷するもの十年にして一切藏經を閲ること
十年にして和州吉野南嶽淨林寺にゝ居ること
満んゝ[illegible]ゝ　前亞相賴宣卿其芳譽を聞しめされ
て城中に致さんゝ迎臣をして迎へ[illegible]ゝ所別
の偈を口占ゝ[illegible]を謝して其偈を曰

僧窓深須謝蚤緣不測畢名到貴遊清代只今
湖海絳莫弱野水白鷗眠。

かゝゝ師遂に大誓願を満嵩寺を竹創あらるるのち
元祿十五年秋閏八月
亞相光貞卿芳命によりゝ城中に住ゝ陸坐圓合をとゝ勤め
たまゝゝ圓通語錄にゝ

秋日過光明寺贈普白和尚　祇南海

三十年前曾識君不圓今復挹清芳機鋒翻水千江月。
瓶鉢歸山一塢雲。霜葉時兼巢鳥下。烟鐘晚帶本魚
聞。自差宦海頭都白。何日青山謝世氣

紀伊國名所圖會巻之一下畢